

## 特別支援学校における教育実習改善の基礎的研究 (2)

— 実習校校長及び教育実習担当指導教員へのアンケート調査から —

池田 浩明 小川 透 武石 詔吾

### Abstract

This study aims to reveal the attitude of school principals and supervising teachers towards practice teaching and identify possible areas of improvement in training. The study revealed that the supervising teachers have “a sense of fulfillment” on practice teaching. The study also revealed that the supervising teachers taught student teachers “how to get involved with children”, “understand them”, and “how to prepare lesson plans”. Further, supervising teachers feel that before practice teaching student teachers should study and learn the “teacher’s role”, the “characteristics of disorders”, and “how to prepare lesson plans”. The survey conducted among principals of the schools that accept student teachers indicated that they positively evaluate the “attitude” of the student teachers toward the training. However, the principals feel that student teachers should study and learn the “teacher’s role”, and “how to prepare lesson plans” before practice teaching.

### 1 はじめに

これまで、坂田ら (2007) が指摘しているように特別支援学校の教育実習担当指導教員 (実習担当教員という) を対象とした研究はあまり多くない。平田 (1980)、天野ら (1999)、坂本ら (2009) によると、実習担当教員自身の勉強になること、養護学校教員の条件としては子どもに対する愛情や忍耐力が必用であること、実習中は指導案作成の指導がされたこと、教育実習前には、指導案の書き方、心構え、専門知識、授業の基本、教育理念などを指導してほしいと考えていることが示された。

本学科の特別支援学校での教育実習は、「障害児教育実習の手引き」に述べられているように、幼児教育に、「個々の障害児に対する保育が十分に行える知識と能力をもってもらいたいという願いから」、平成 13 年度から始まった。しかし、実習校の教員や校長が上記のようなことを考えているのかどうかなど教育実習や大学に対する意見を求め

る調査をしてこなかったことから、池田ら (2012) は、今後の特別支援学校の教育実習の充実を図るとともに大学における特別支援教育に関するカリキュラムの改善・充実に資することを目的として、アンケート調査を行った。その結果から、実習指導において多くの担当教員が、「充実感」を得ていたこと、また、実習生に対しては、「子どもとの関わり方とその理解の方法」、「指導案の書き方」を指導したこと、実習前に大学で身につけてほしい内容として、「障害の特性」、「指導案の書き方」、「子ども理解の方法」、「教師の心得」があげられたことが示された。しかし、実習担当教員と校長の自由記述の回答については概要のみの報告であった。

そこで、池田ら (2012) の調査を 2 年続けて実施したので、実習担当教員の意識及び実習担当教員と校長の自由記述の回答結果から教育実習に対する実習校の考えを明らかにし、教育実習の充実と大学の特別支援教育関連カリキュラム改善の示唆を得るために検討したので報告する。

---

Hiroaki IKEDA 藤女子大学人間生活学部保育学科  
Toru OGAWA 藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師  
Shogo TAKEISHI 藤女子大学人間生活学部保育学科非常勤講師

## 2 方法

平成 23、24 年度の本学科の学生が教育実習を行った校長と特別支援学校の実習担当教員に対してアンケート調査を実施した。担当教員には実習に対して感じていることを自由記述で回答する一つの質問と 4 項目から 11 項目の選択肢から 3 項目を選択する 4 つの質問からなる「調査票」によるアンケート調査を実施した。校長に対しては、4 項目について自由記述で回答する調査票によるアンケート調査を実施した。平成 23 年度は、実習担当教員 40 名中 29 名 (72.5%)、17 実習校中 13 校 (76.4%) の校長から、平成 24 年度は実習担当教員 65 名中 55 名 (84.6%)、31 実習校中 21 校 (67.7%) の校長からの回答があった。なお、2 年目も同じ校長には調査用紙は配付しなかった。多選択法による結果は、集計後その割合を%で表記した。自由記述回答の結果は KJ 法により分類して整理した。

## 3 結果と考察

### (1) 「実習指導の充実感」

実習担当教員がどの程度の充実感を得たかを年度ごとに示したのが図 1 である。

「かなり充実感を得た」と「少し充実感を得た」を合わせるとそれぞれ 96.6%、96.4%であった。実習担当教員の「充実感」の高さが示された。

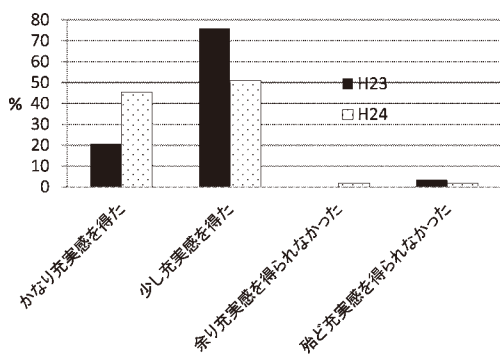


図 1 実習指導の充実度

2 年間の結果から、実習担当教員として実習生の指導を担当する役割や使命感が高く、実習生の指導が自己の教育を振り返る機会となったことなどから高い充実感を示したことが考えられる。

### (2) 「充実感の内容」

実習担当教員が充実感を感じた内容を図 2 に示した。充実感の内容として 2 年間を通じて「実習生の姿勢・態度」、「子ども理解」、「自身の指導の再認識」の 3 項目が多かった。「実習生の姿勢・態度」、「実習生の子ども理解」が多かったのは実習生の真摯な態度、事前学習やボランティアの成果が現れたことが考えられる。また、担当教員として指導の成果、やりがいを感じていたことが予想される。「自身の指導の再認識」が高かったのは、平田ら (1980)、磯崎ら (2002) が示しているように、教育実習の指導は、実習担当教員にとっても指導の再考の機会となったことが示された。

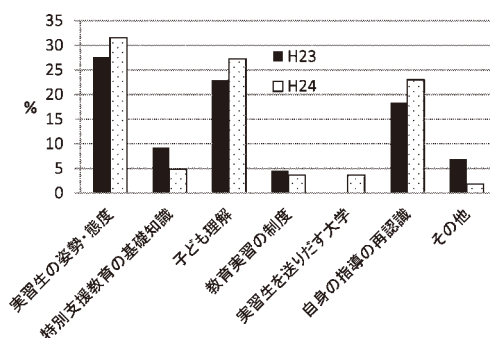


図 2 充実感の内容

### (3) 「実習生に対する指導内容」

実習担当教員が実習生に指導した内容を年度ごとに図 3 に示した。

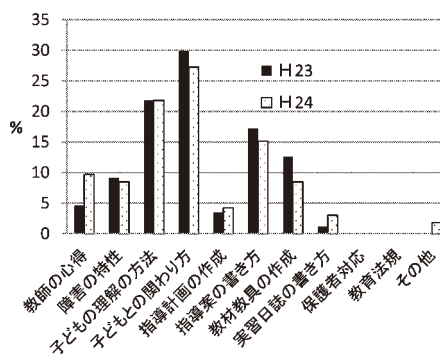


図 3 実習生に対する指導内容

2 年間の実習担当教員が指導した内容では、「子どもの関わり方」、「子どもの理解の方法」、「指導案の書き方」の項目が多かった。教育実習という実践の場面であることから、子どもの理解や関わ

り方を中心に指導がされたことが分かる。この結果は、池田（浩）ら（2011）の実習生に対する調査結果で「子どもとの関わり」がどの項目でも多かったこととも関連していることが考えられる。次に多かった「指導案の書き方」に関しては、池田（浩）ら（2011）の実習生に対する調査研究の「実習中、辛かった」ことの中で「指導案の作成」が最も多かったことから、指導案の書き方に関する指導が重要な内容として捉えられていることが示唆される。

#### (4) 「実習前に大学で身につけてほしい項目」

実習担当教員の立場から実習前に大学で身につけてほしい内容に関して年度ごとの割合を図4に示した。

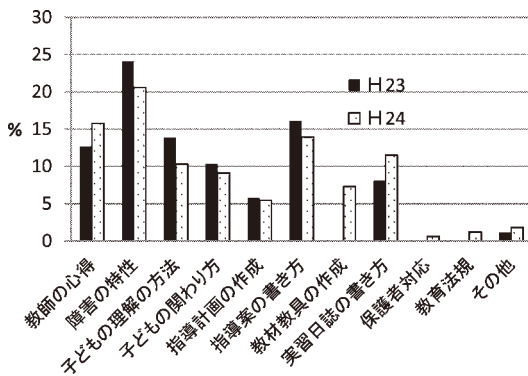


図4 実習前に大学で身につけてほしい項目

実習担当教員があげた項目で多かったのは、「障害の特性」、「指導案の書き方」、「子どもの理解の方法」、「教師の心得」、「子どもとの関わり方」、「実習日誌の書き方」であった。

「障害の特性」、「子どもの理解の方法」、「子どもとの関わり」が実際の指導場面では必要であり、実習初日からある程度の実践力が要求されることから当然の結果であると思われる。

「指導案の書き方」、「実習日誌の書き方」も多い項目であった。指導案作成と実習日誌の記入の未熟を担当教員は感じており、大学での指導が求められたのであろう。

「教師の心得」も多い項目であった。池田ら（2011）では、実習生は、姿勢・心得よりも実際的な内容を大学の講義に求めているが、実習担当教員は、教師としての意欲や心構えも大事にしてい

ることが分かる。大学の講義に教師の意欲や心構えに関する内容を扱うことが今後とも求められていると考える。

#### (5) 教育実習の指導を通して実習担当指導教員が「考えたこと、感じたこと」

教育実習指導を通して実習担当教員が考えたこと、感じたことに対する自由記述は2年間あわせると98あった。それらはKJ法で①実習に対する意欲・態度、②実習前のボランティア、③日誌・指導案の書き方や文章力、④特別支援学校教諭免許、⑤自身の指導、⑥実習前に身につけてほしいこと、⑦大学への要望の項目に分類された。分類された各項目に含まれる数の割合を図5に示した。

自由記述内容では、「実習に対する意欲・態度」、「日誌・指導案の書き方」、「自身の指導」「実習生への要望」が多かった。「実習生の意欲・態度」では、意欲的、まじめ、一生懸命、礼儀正しい、しっかりしたなど実習生を肯定的に評価するものが7割と多かったが、しかし、一部に積極性、基礎学力に関することや日誌・指導案の誤字、表現、文章力に関することが指摘された。「自身の指導」に関する記述では、充実感の内容でも示されているように、おおむね、教育実習を肯定的に捉えた表現が多かった。「実習生への要望」では、実習生に対する応援メッセージがみられ、このことから、実習担当教員が実習を肯定的に捉えていることがうかがえる。「教員免許」に関しては、特別支援学校で教員になれる即ち教員採用試験受験資格としての小・中学校の基礎免許の取得に関するものであった。

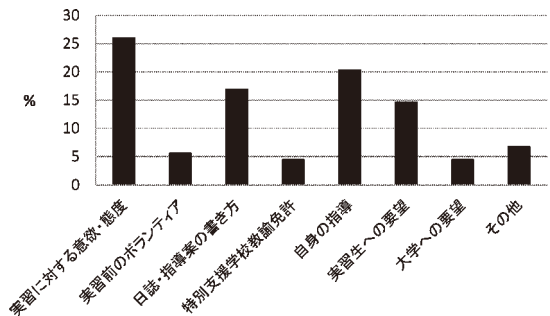


図5 指導教員の自由記述の内容

以上のことから、多くの実習担当教員は、教育実習生を肯定的に捉え、教育実習についても自身

の教師としての指導の再確認のよい機会になるなど肯定的に捉えている表現が多いことから、教育実習は、実習生にとっても実習担当教員にとっても困難の多い仕事ではあるが、教育実習の意義や担当教員の役割の重要性・やりがいを感じていることが示唆される。

#### (6) 校長への調査

平成23年度は15校、平成24年度は21校から回答を得た。質問項目は、①実習生の姿勢・態度、②教育実習の制度、③大学への要望、④その他であった。

##### ①「実習生への姿勢・態度」

2年間を合わせると33の回答を得た。その内のほとんどが意欲的、まじめ、明るい、一生懸命など実習生を肯定的に評価した回答であった。これは、実習生に対する事前指導、先輩の影響、本人の資質などから、高い評価を得たことが考えられる。一部に姿勢、意識、化粧などのマナーについて触れた回答があり、事前指導にこれらのことに関する内容を組み込むことが今後も必要と思われる。

##### ②「実習の制度」

2年間を合わせると、27の回答があった。回答には、実習の必要性や意義について肯定的な表現が多いが、実習生の増加に伴い受け入れ校の負担、受け入れる時期、2・3週間の実習期間について検討が必要で、そのためには、小中学校での受け入れや教育委員会の関わりも求めている回答があった。

##### ③「大学への要望」

2年間を合わせると33の回答を得た。事前指導としてボランティアの必要性、日誌・指導案の書き方の指導、意欲・心構え・マナーの指導をさらに充実させるなどの回答があった。将来の進路・採用に関わって、養成大学として小学校等の基礎免許の取得を希望する回答があった。意欲や資質のある教員が求められていることが感じられる。また、実習校の負担軽減や充実した教育実習の実施ため実習校と大学の連携に触れた回答があった。さらに、特別支援教育を本気で担う気持ちを持った実習生を送り出す努力を大学に求める回答があった。

##### ④「その他」

2年間を合わせると15の回答があった。実習校の教員や子どもに対して教育実習生からの積極的な関わりの必要性、大学と実習校の連携の必要性、即戦力のある学生の育成などについての回答があった。

## 4 全体考察

池田(雅)ら(2011)は、中央教育審議会答申(2006)の「今後の教員養成・免許制度のあり方について」を検討する研究において、「教育実習は、「養成段階で習得すべき最小限必用な資質能力」の内容を実践的に学習し実質化するものとして位置づけられている」(p.21)と述べている。「最小限必用な資質能力」は、1997年の教養審答申では、専門的な知識・技能、教員としての使命感・責任感・教育的愛情、教科指導、生徒指導を実践する資質能力とされている。

実習担当教員への調査結果から、実習生に対する指導内容として、「子どもとの関わり方」や「子どもの理解の方法」、「教材・教具の作成」、「指導案の書き方」など教員としての資質能力に関する指導が中心であったことから、実習担当教員は教育実践者として、教育実習に、実践的な指導力を実践的に実質化することを求めていることが示された。事前に身につけてほしい内容としては、「障害の理解」、「子ども理解の方法」、「子どもとの関わり方」、「指導案の書き方」など実践的な指導力に関わると思われる内容が求められていることが示された。このことから、大学における事前指導や教育実習関連科目の指導内容としては、子どもの指導に関する具体的・実際的な内容が求められていることが示された。

国祐ら(1984)は、実習前のオリエンテーションの指導内容として「実習の意義や心構え」が8割以上の一般の小・中学校で指導されたことを明らかにしている。また、平田ら(1980)は、教員としての心構えの必要性を述べている。教員として最小限必用な資質能力の一つとして、教養審答申(1997)では教員としての使命感・責任感・教育的愛情をあげている。本調査研究において担当教員が事前に大学で身につけてほしいと考えている内容の結果として、「障害の特性」「指導案の書き方」に次いで「教師の心得」をあげる教員が多



かった。また、校長の大学への意見・要望の回答結果からも意欲・心構え、マナーの指導が求められていることが示された。これらのことから、大学の事前指導では、実際的な指導に関することともに、教師の心構えや教育的愛情などについて指導することが必用であることが示された。今後も、事前指導ではすべての実習生が使命感などをしっかり持てるような指導の工夫が求められる。

中教審答申(2006)では、教育実習の改善・充実において大学と実習校と教育委員会が連携して教育実習を円滑に実施することが求められていると述べられている。同時に大学と実習校の教員同士が連携して指導案の作成や教材研究の指導を行うことも述べられている。実習担当教員から大学へ要望が多く述べられたこと、校長の回答からは、充実した教育実習のために実習校と大学及び教育委員会が関わる必要性を述べたものあることから今後は、さらに大学と実習校が連携・協力して教育実習の実施に取り組む必要があることが明らかになった。2012年度北海道の特別支援学校教諭養成大学と特別支援学校校長会は教育委員会の支援を得ながら、北海道特別支援学校教育実習連絡協議会を設置し、実習の円滑な実施に向け歩み始めた。

今回の調査で特筆されることは、実習担当教員の充実感の内容の調査結果からも、校長に対する実習生の姿勢・態度の調査結果からも本学科の実習生に対する肯定的な記述が多く含まれていることであった。このことは、本学科の特別支援教育関連科目だけでなく、幼稚園教諭・保育士養成関連科目において、実習生の教育実習に対する姿勢・態度が養成されたことの結果であることが考えられる。養成大学のカリキュラム全体を通して教師としての大切な資質の養成が必要であることが示されたものと思う。

## 5 おわりに

本研究では、実習担当教員および実習校の校長に対して、実習に対する意識を明らかにし、大学のカリキュラムの改善・充実の示唆を得るためにアンケート調査を実施した。

2年間の継続調査から実習担当教員は教育実習に対して高い充実感を感じていることが示された。中教審答申(2006)等に示された教員としての資

質能力の育成に資する教育実習の充実を図るためには、子どもの理解、子どもとの関わり方、実習日誌・指導案の書き方など実践的・具体的・技術的な内容を事前指導の内容とすることと同時に、教師としての心得・心構え・教育的愛情・使命感もあわせて事前指導および実習を通して育てることが大切であることが示された。そのためには、養成大学と実習校および教育委員会の連携・協力が必要であることが示された。

本研究の実施に当たり、協力いただいた特別支援学校の校長・教育実習担当指導教員に対して敬意と感謝を表したい。

## 文献

- 池田雅則・小林正泰・宮城哲(2011)「教育実習に関わる制度・政策の分析」東京大学大学院教育学研究科 基礎研究学研究室 研究室紀要 第27号, 21-38
- 池田浩明・小川透・武石詔吾(2011)「特別支援学校の教育実習における学生の意識(1)」藤女子大学紀要第II部48号, 125-131
- 池田浩明・小川透・武石詔吾(2012)「特別支援学校における教育実習の改善の基礎的研究(1) — 教育実習担当指導教員へのアンケート調査から —」藤女子大学研究紀要第II部第49号, 85-89
- 磯崎哲夫・磯崎尚子・木原成一郎(2002)「教育実習に対する国立大学付属学校指導教官と教育実習生の意識調査 — 教育実習におけるメンタリングの可能性を探る —」日本教科教育学研究誌 9, 第25集, 第2号, 21-30
- 国祐道広・西川信広(1984)「教育実習の指導実態と指導教員の意識 — 小・中学校を中心として —」大谷大学紀要 19巻1号, 120-155
- 坂田花子・東平朋子・江田裕介(2007)「附属特別支援学校における教育実習の在り方について探る — 教育実習生への調査を通して —」和歌山大学教育学部実践総合センター紀要 No.17, 111-117
- 坂本学・丹羽克文・下地栄津子・斎藤志保子・河辺正明・山田賢治・山本敬子(2009)「特別支援学校小学部での教育実習における教育実習生に対する指導内容 — 指導案指導と授業反省会を通して —」三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 29, 47-53
- 平田永哲(1980)「養護学校教育実習に関する研究 — 障害児担当教員養成の在り方に対する現職教師の意識調査 —」琉球大学教育学部紀要第二部, 第24集, 252-258
- 藤女子大学人間生活学部保育学科編「障害児教育実習の手引き」